

# 全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

## ■第2章「1号機爆発」

3月12日午後、福島第一原発1号

機では格納容器の圧力が高止まりし

ていた。このままでは格納容器が損

傷して大量の放射性物質が拡散して

しまつ。何とかして格納容器から蒸

気を放出するベントを成功させなけ

ればならない。中央制御室の当直長

伊沢郁夫(52)は最後の賭けに出よう

としていた。

ベントに必要な2カ所の弁を手動

で開けよう。既にこの日午前、二

つの班を原子炉建屋に突入させてい

た。だが、うち1カ所は格納容器下

部にあり、放射線量が過ぎて近付

けなかった。

伊沢はもう一度、格納容器下部へ

Ⅱ

## ベントへ最後の賭け

の突入を決断したのだ。現場の線量

はさらに高くなっている恐れがあ

る。しかし全力疾走で弁までたどり

着き、開けた後に全力で戻れば、被

ばくはある程度抑えられるはずだ。

まさに決死の突入だった。

この時の状況を作業管理グループ

大野光幸(51)は「あれをやっても駄

目、これをやっても駄目。八方ふぎ

がひでしただけ』『まだできる』と考

えていましたね」と振り返る。ベ

ントたちは諦めてはいなかった。

午後2時ごろ、装備を整えた第3

班の2人が制御室を出発した。大野

ら2人を見送ってほんの数分後、

免震重要種の緊急時対策本部とな

## 「排気筒に煙」で断念

がる当直長のホットライン(専用

電話)が鳴った。

「スタック(排気筒)から白い煙

が出てぞ」

排気筒(高さ約120メートル)は原子

炉建屋の西側にあり、格納容器と

なっている。

「白い煙…」

伊沢はうつろふと、何かに思

き、連れ戻した。

実はこのころ、対策本部の復旧班

が全く別の方法でベントを試みてい

た。1号機原子炉建屋西側の大物搬

入口にトラックで可搬式の空気圧縮

機を持ち込み、目標となる弁につな

がる配管に空気を送り込み、弁を

開けようとしていた。

この作業が功を奏したようだった

た。対策本部は格納容器圧力の低下

を確認、午後2時半にベントが成功

したと判断した。事態の悪化は食い

止められた。はまだった。

だが状況が好転することはなかつ

た。午後3時36分、それは何の前触

れもなく起きた。

「ドカーン」

爆発音とともに、ものすごい衝撃

で制御室が揺れた。(敬称略。年齢

肩書は当時。共同通信 国分伸夫)



福島第一原発1、2号機の排気筒(中央手前)＝2013年8月(東京電力提供)

1 原発を確実に廃炉にする